ドラマ女性学

古都で楽しむアレン流人生

ジャーナリスト
松本 侑壬子

ウッディ・アレンといえば、ニューヨークを舞台にした知的で皮肉の利いたラブ・コメディの巨匠。だが、二〇〇五年以降は、舞台をロンドン、バルセロナ、パリと移し、今回はローマだ。オードリー・ヘプバーンの「ローマの休日」（一九五四年）から、初老のロバート・デニーロが若い娘と恋を実らせる「昼下がり、ローマの恋」（二〇一二年）まで数多くの恋愛映画の舞台。映画の冒頭で、交通警官がイタリア語なまりの英語で観客に向かって「この街では、すべてが物語なんだ」と語りかける通りに。

恋愛都市ローマといっても、アレンはアレンだ。皮肉も笑いもひねりも随所に健在。思わず声を上げて笑ってしまうおかしさから、そうそうと鋭い皮肉にうなずきながらにやりという場面も。

道を聞いた相手とそのまま結婚へと進む若いカップル、アメリカから来た有名建築家が彼に憧れる青年に懇切丁寧に恋の指南をする話。知らないうちに有名人にされて、大騒ぎの末に忘れられる平凡な会社員の話。田舎から出てきて、それぞれ不倫騒動に巻き込まれる新婚夫婦の話、と四組の話が同時進行する。

最初の組のアメリカ娘の父親役がアレン。風変わりで神経質な元オペラ演出家で、娘の婚約を聞いてニューヨークから夫婦で飛んでくる。葬儀屋を営む婚約者の父親は、風呂でシャワーを浴びながら歌うのが趣味。歌声の素晴らしさにアレンは何とかオペラ歌手デビューさせたいと奔走する。だが、風呂の外ではただの素人で、オーディションにも引っかからない。一計を案じたアレンは、前衛風演出でオペラ「道化師」の主役がプラスチックの囲いの中でシャワーを浴びながら歌う演出に。本物の有名オペラ歌手F・アルミリアートが大真面目でときどき柄のついたブラシで擦りながら絶唱する、おかしさ素晴らしさ！確かに、風呂の中では歌自慢って日本にもいますよね。風呂と言えば、昨年の大ヒット「テルマエ・ロマエ」も古代ローマと現代日本の風呂を舞台にした映画だった。大笑いしながら結構リアリティもあったりするところは共通している!?

皮肉の極みは、会社員レオポルドの話だ。ある朝家を出ると、突然、待ち構えていたパパラッチにもみくちゃにされながらテレビ局に連れて行かれ、すぐ化粧されて、スタジオ入り。インタビュアーに朝食について聞かれ、答えると「判明」「原因追求」「説明要求」などの重大発表のような扱い。どこへ行っても〝テレビに出ている有名人〟と握手とサイン攻め。映画の試写会に招かれ、テレビニュース番組にも出演。やっと群衆対応に慣れたと思ったら、やじ馬は次の〝有名人〟を見つけて去って行った…。当節のマスコミのあり方への痛烈な皮肉だろう。

どのエピソードにも皮肉はあるが毒が無い。有名人騒ぎの経験を経て、当の本人らがそれぞれに「温かい家族と居心地のいい家庭に勝るものはない」と、平凡な幸せを再確認する。ローマの街のなせる技か、アレン七七歳の境地か。オール・ロケで登場する古都の名所旧跡一七カ所。ローマ色たっぷりの幸福感あふれる恋愛コメディだ。

『ローマでアモーレ』

アメリカ・イタリア・スペイン合作映画（111分）

監督・脚本・出演：ウッディ・アレン

出演：アリソン・ピル、アレック・ボールドウィン、
ロベルト・ベニーニ、ペネロペ・クルス、
ジェシー・アイゼンバーグ、エレン・ペイジ

公開中

© GRAVIER PRODUCTIONS,INC.photo by Philippe Antonello